

台湾における仏七簡介——西蓮淨苑を中心に——

蓑 輪 顯 量

はじめに

台湾の宗教現状に興味を持ち始めて既に久しい年月が経過したが、この度は台湾で頻繁に行われている「仏七」なる行事に参加する機会を得た。調査期間は平成十七年二月十四日から十七日までの四日間の短いものであったが、西蓮淨苑、西蓮光明寺及び慧日講堂などを訪問することが出来た。まず「仏七」は、台北郊外の三溪にある西蓮淨苑において開催されたものであった。幸い、この西蓮淨苑の現在の住持が、釈惠敏法師であった。西蓮光明寺を宿舎として提供して頂き、ここを拠点に西蓮淨苑に赴かせて頂くなど、法師には多大なる便宜を図っていただいた。まず記し

台湾における仏七簡介（蓑輪）

て感謝の意を表したい。では、台湾に行われている「仏七」なる修行法及び西蓮淨苑において行ったインタビューを中心に簡単な報告を行いたい。なお参加した調査メンバーは、東北大学の曾根原理先生、本学教員（非常勤）の青野貴芳先生、本学卒業生の倉島隆行法師及び筆者の四名である。

一 西蓮光明寺

まず宿泊先として利用させて頂いた樹林の西蓮光明寺の概要を述べる。

住所 台北縣樹林市大安路光明街六二號

この寺院は、先代の住職が、とある篤信家から土地を借



西蓮光明寺門通宝殿の前にて

り受け、その土地の名義を寺院に変更せずに、そのまま寺院として使用していた。ところがその篤志家が亡くなった後、遺族から寺院の土地を返してほしいとの希望が寄せられ、トラブルとなってしまった。それを解決できずにいたところを西蓮浄苑が購入し、現在に至っているという。そ

こで、寺院名は光明寺から西蓮光明寺となった。現在のところ、尼僧四名、男僧一名が居住するが、将来的には僧寺とする予定で、現在の拠点となっている三峡鎮の西蓮浄苑は、女性の出家者が多い現状に合わせて、将来的には尼寺とする予定だそうだ。これは、台湾には男僧と尼僧とが共存する寺院が存在するが、そのような形態の寺院にはしないことを意味する。

私たちは、二月十四日、十五日と連泊させていただき、寺院の生活を体験させていただいた。西蓮光明寺での朝の日課は以下の通り。

午前	三時三〇分	起床	
	四時〇〇分	六時〇〇分	朝課
	六時三〇分	七時〇〇分	朝食

この後、七時三〇分より西蓮浄苑に移動し、西蓮浄苑で行われていた仏七に参加し、また二人の在家者及び四名の出家者にインタビューをさせて頂いた。

西蓮浄苑は現在、発展途上にある寺院と見え、少しばか

り宗派化の傾向が芽生えつつある。もちろん西蓮浄苑が中心拠点である。ランチに相当する場所が三峽、桃園、土城、板橋、樹林にあるのが元の光明寺であり、現在、西蓮光明寺と呼ばれることは先に述べたとおりである。その伽藍は、山の谷間に這うような感じに建立されており、階段状に奥へと展開している。手前から円通宝殿、大雄宝殿と段差上に連なっており、大雄宝殿とおなじ平面上に、齋堂（食堂）があった。最初の殿堂になる円通宝殿には観世音菩薩が安置されており、観音菩薩で信仰を集めているように思われた。なお、僧房は、大雄宝殿を囲むように、コの字型に展開する二階建ての建物があつて、そこが僧侶が居住する住房になっていた。一部屋あたり六畳くらいの広さであり、ベッドとタンスが備えられており、私たちは一人ずつその僧房に宿泊させて頂いた。

二 西蓮浄苑

住所 台北縣三峽鎮溪東路二一巷三一弄九號

西蓮浄苑には現在、出家人が七十名ほど居る。その他として西蓮光明寺に五名が生活しているという（その他の支

台湾における仏七簡介（襄輪）

部に五名ということ。西蓮浄苑全体で、男性の僧は十名、女性の僧が七十名とのことであり、ここでも尼僧が圧倒的多数を占める。

西蓮浄苑は智諭法師（一九二二—二〇〇〇）が創建した寺院であり、最初は小さな庵から始まった。智諭法師は、



西蓮浄苑 正面入口

大学の学生とともに仏法の体験合宿を行い、その中から後継者を育てた方であり、現住の釈惠敏法師もその一人である。彼ももとは智諭法師と出会ったことが機縁になって出家したという。智諭法師は、晩年の十年間は足が不自由となり歩行困難な状況にあったといひ、民国八十九年（二〇〇〇年）農曆十一月十四日に世寿七十七歳で亡くなった。^②

西蓮淨苑は、目下のところ、様々な行事を行う中堅の寺院に成長しており、その年間行事の代表的なものとして、蓮池会、中元法会、観音菩薩出家法会、報恩会、仏方会、年終供仏齋僧、観音菩薩聖誕法会、清明法会、浴仏法会、観音菩薩成道法会、それ以外に仏一、仏七などが存在する。^③ 観音に関する法会が幾つも設けられていることが特徴と言えるが、その年間の行事の時には、かならず信者さんが手伝いに参加する。普段からのボランティアは三名で、近隣からの出仕であるという。なお、近隣のボランティアのお手伝いとは、殆どが薪作りのためとのことであつた。

仏七の修行は、農曆の新年を夾んで年に四回行つている。暮れに二回、年が明けて新年になって二回ということ

になる。この仏七については、次章で触れたい。なお、仏七等の修行の時、智諭法師は午後の開示を行ったが、今現在、惠敏法師は午前の開示を行っているという。その理由は、午前の開示の内容を午後の実習の中で確認することが出来るからであるという。

ちなみに、仏七に関する簡単な説明があつた。仏七の中で目指されているものは、

「知長知短息分明」（息の長い短いを如実に知ること）

「念仏調心不浮沈」（仏を觀想して心を調え、浮ついたり

沈んだりしないこと）

「極樂淨土唯心觀」（極樂淨土は心の中にあると觀じるこ

と）

「証得一心淨土」（一心の淨土を証得すること）

であるという。念仏の中で、具体的には①覺察力②防護力（この二つは防護の側面）③対治力④莊嚴力を養うことを目的にする。覺察力によって注意力を養ひ、防護力によって律儀を守り、次に対治力によって貪瞋痴の三毒を対治し、莊嚴力によって淨土を莊嚴しまた創造するという。

また、念仏するときには、身・口・意の三業に涉つて念

仏することがまず最初であり（この時には身は動き、口には弥陀の名号を唱え、心に念じる）、次に口・意に念じ（口には弥陀の名号を唱え、心に念じる）、最後に意に念じる（心に弥陀を念じる）という。最後の意に念じることは「止静」とも表現される。この「止静」が重要な目標であ

るように思われた。阿弥陀を念じることは「日」即ち太陽をイメージすることでもあるといい、その意味では日想観や月輪観に近く、また其処から白毫観に発展することもあるといふ。

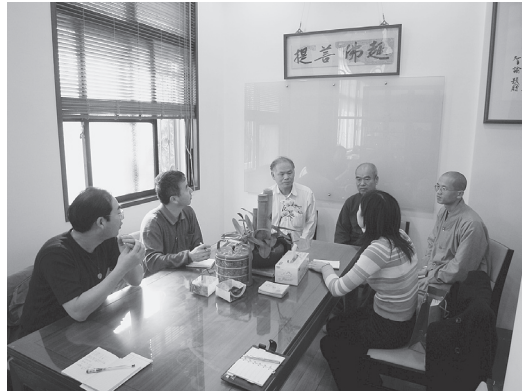
三 西蓮淨苑でのインタビュー

次に、在家の方にインタビューをさせていただくことができた。王光旭氏、陳敬隆氏の二名である。まず王光旭氏（五十八歳）のインタビューから。

法名は法旭。板橋地区の在住。職業は公務員。法名は出家した時の師によって規則があり、ある代には「慧」、次の代には「如」、次の代には「法」、次の代には「心」、次に「浄」と一字ずつを戴くのだそう。同期の弟子は「蓮友」と呼ばれ、「蓮華化生」「花開見仏」を目指す仲間となる。王光旭氏は十八年前、子供のためにこの寺院にやってきたのだそう。不思議なことに、当時、どうしても給料を子供のために使ってしまうことが続いたという。具体的には子供の体調が悪くなったり子供が事故にあったりして、いつもお金を使ってしまう。そこで地元でタンキーに



智諭老和尚紀念堂前にて惠敏法師



在家者へのインタビュー

占ってもらったところ、「免親債主」と謂われたという。一人の僧侶に帰依しなければならぬと謂われ、そこで智論法師に帰依すると不思議と果報が得られるようになった。これが機縁となり、西蓮淨苑に毎年、奉仕するようになった。実際、智論法師に「超渡（極楽世界にいけるよう

追善供養をすること）」をしてもらい、一家で帰依するようになった。今までに「仏七」に参加したことは一回だけ、あとは裏方の手伝いをしているという。朝には観音の法号を唱え、夕には弥陀の念仏を唱えているという。子供の頃は、キリスト教を信じていたが、今は浄土教を信じている。毎日念仏しなさいと言われて、昔は数を大事にしたが、今は一心不乱に念仏することを大切にしている。ちなみに、最初は一回に二千回から三千回の念仏を唱え、やがては二万回から三万回の念仏を唱えたこともあったそうだ。このように多くの回数の念仏を唱えることは、講堂の講師から教わったことだという。なお、今でも法会の際には、回向のために念仏の回数を数えることがあるそうだ。老師に対しては「信頼している」とのことであった。

次に陳敬隆師のインタビューから。

法名は法敬。泰山の近くに住む。陳氏は若い頃から求道の志が強かったという。西蓮淨苑に出入りするようになったから同じく十八年であるという。その頃「養小鬼」が就き、悪いことをしてくることがあった。そのうち家の者に観世音菩薩が乗り移り、大きな寺院へ行きなさいとのお告

げをして下さった。そこで、この西蓮淨苑に来て老和尚（智諭法師）に帰依することになったという。経を唱えるようになってから、心が清淨となり妄念や貪りが少なくなったという。法敬師は、悪を取り除くために飲酒の習慣を止め（心が乱れるからであるという）、週に二回、月に八回寺院に参詣する。老師を「とても信頼している。それは極楽へ案内してくれるから」ということであつた。

次に出家者の方、慧圓、慧謹、法可、心安という四人の方に話を聞かせてもらった。それぞれ出家の動機を聞かせて頂いた。その内容は以下の通り。

まず慧圓比丘尼。彼女の場合は、母親が仏教信者であつたことが大きく影響しているという。大学時代に仏学研究のサークルに参加し、人生の生き甲斐を探していたときに仏教に触れたことが出家の動機になった。一九八九年に出家、週に一回、西蓮淨苑に来て智諭法師等の話を聞いた。そして、ここに生き甲斐を感じ、今では仏土が一番の教育であると感じているという。大学卒業後、中学高校の教員を二年間務めたが、その時には家族が支えてくれた。しかし、自己の問題を解決することは出来ず、出家の意識を固

めた。そして、出家の時にはとても決心が必要だったという。

慧謹比丘尼。親族の者に仏教信者は居なかつたが、高校生の時に仏光山の行事に触れることがあつた。また大学の時に仏学サークルに参加したことが切っ掛けになり出家し



出家者へのインタビュー

た。出家の時は大学卒業後すぐであり、出家するかどうかは自分のみの問題と感じていた。經典の説法を西蓮淨苑に聞きに来て、仏七にも参加した。そして仏学に魅力を感じた。家庭や経済的な問題も無く、「定力」に感心したという。また念仏には止観の双方が存在するとも考えており、止観について次のように説明して下さった。まず止は心を一つの対象に向けることであり（心一境性）であり、その対象となつているものが阿弥陀仏という名号であり、一心不乱に唱えることが淨土般若学の捉えるところである。それは概ね「寂」の範疇に入る。それは鳩摩羅什が逍遙園に説いたことと同一である。また、「観は縁起を觀ずる」とこととであり、「縁起は十六觀經所縁の觀境の如く」であり、「光明によつて一切の物を照らす」ことであつて、その時には「明々了々」と知ることになるのだという。

法可比丘尼。小さい頃から觀音様に参拝していた。祖母の死に際し、智諭法師が助念に来てくれたが、その時に興味を持った。ちなみに現在、台湾では助念が盛んであるという。助念とは、臨終に望み極楽淨土に生まれ変われるよう、周りの者たちが助太刀の称名念仏をすることを言う。

また小さいときから緊張しやすい性格で、死のことを考えると特にそうであつたという。出家は自己の調心の問題であると感じた。

心安淨人⁴。若いときから民間信仰に関心を持つていた。知人に占い師を紹介してもらつたことがあつたが、一つの信仰を持つことがよいというアドバイスを受け、仏教を選んだ。

以上、出家の動機について、それぞれの事情を話して頂き、その後、簡単な雑談となつたが、その中で、台湾の仏教界の現状について興味深い話が聞かれたので記しておきたい。現在の出家者の男女比率は、女対男 \parallel 五対一になるほど女性の出家者が圧倒的に多く、大学での仏学の専攻者も女性が多いのだそう。台湾全土には二三〇〇万人の人口があるが、そのうちの約八百万人が仏教信者であり、三百万人が菜食主義者であるという。もちろん菜食主義者がすべて仏教者というわけではなく、一貫道という道教信仰や齋教という緩い信仰に支えられた人たちも居ることは言うまでもない。

また西蓮淨苑における出家者の方々の日常生活における

時間区分は、次の通りであった。

午前	三時三〇分	起床
	四時〇〇分〜六時〇〇分	早課（朝課）
	六時三〇分〜	早齋（朝食）
	七時〇〇分〜一三時三〇分	出坡（普請） 做事
	一三時三〇分〜	午齋
午後	一二時〇〇分〜二時〇〇分	午休（昼休み）
	一四時〇〇分〜一六時三〇分	上課
		（各自の仕事）
	一七時〇〇分〜一八時三〇分	晚課
	一八時三〇分〜	自習
	二〇時〇〇分〜二二時〇〇分	念仏 敲香
	二二時〇〇分	就寝

活動としては、朝夕の課が重要な役割を果たしており、念仏の実践が中心に置かれている。在家信者との関わりは、在家の方の家に説法に誘われれば出かけていくことがあるという（専ら講説のため）。「経懺」（いわゆる死者へ

の供養）のために在家信者の家庭を訪れることはない。但し死者への供養を全くしていないかというところでなく、それは寺院で行われる地藏法会に信者さん達に参集してもらい、その法会において信者さんたち自らが追善供養を行うのだという。

僧侶の交流は自由に行われており、読書、参訪などが頻繁にあるという。宗教行政に関しては、所轄の官庁は内政部、実施は県または市単位で行われる。つまり行政的事項は内政部の管轄になり、民政局宗教儀礼科が取り仕切ってきたが、現在のところ、科から一段上のランクである「司」に昇格する途上にあるようだ。

また台湾内部にはテレビ放送局が九〇局あるが、そのうち宗教系の持つものが六局、仏教系五局、キリスト教系一局だそう。仏教系では慈濟功德会の経営する大愛が有名であるという。

出家受戒会に関しても話題が及んだ。一九九八年までは中国仏教会が受戒会（いわゆる三壇大会）を取り仕切り、毎年八〇〇人くらいの方が出家していたそう。ところが一九九八年に「解放自由伝戒」すなわち伝戒が解放され自

由になったという。それ以降は、毎年、五、六箇所の寺院が道場となり受戒を実施するようになり、毎年、年間一〇〇〇人程度が出家しているようだ。

一九九三年には三壇大戒における菩薩戒の解放がなされ、菩薩戒の内容が自由になったという。在家の菩薩には『優婆塞戒經』の六重二十八輕戒、及び『梵網經』の十重四十八輕戒が認められ、出家の菩薩には『瑜伽論』の四重四十三輕戒なども認められた。

さて、台湾の仏教は人々の間に活躍するものでなければならぬとする「人間浄土」思想が特徴となると言われ、一般に「人間仏教」と呼称される。その故に普通の人々から好意的に認知されているという。またその方向で社会的に認知された集団は、なんとと言っても高雄の仏光山、花蓮の慈濟功德會、台北の法鼓山がビッグスリーであろう。しかし、現象面で見れば仏教は大変盛んに見えるが、実際の出家者の中で見れば、それは極めて少ない者たちに過ぎないとも見られているのだそうだ。特に、仏光山、慈濟功德會、法鼓山は教育、慈善活動に熱心で、伝統的な仏教僧伽の側でも、同じ方向性が打ち出され、教育や慈善に力を注

ぎつつあるが、次の指導者の人物が育っていないのではないかという。一種の危機感が表明されたのである。実際、中堅どころでは惠敏法師の次を担う世代が育っていないようであり、三、四十代の僧侶で指導的な立場に立ちそなう人が存在しないことを大変憂慮されていた。

四 仏七——念仏による修行——

では具体的な仏七の内容を記そう。仏七は念仏を七日間行うことから命名された名称であることは容易に想像が付くところであり、「念仏七永日」「念仏打七日」とも呼称される。禅七は禅定を専らにする修行を七日間行うことであるから、禅七と仏七とが対比される修行であることは言うまでもない。また一日だけ参加する「仏一」と呼ばれる修行も存在する。私たちが参加させて頂いたのは、民国九四年第三期の仏七で、二月十四日から二十日までの予定で開催されていた。

仏七に参加する者は、一旦始めたら円満するまで七日間務めることが求められており、途中辞退は認められていない。また話をしたり本を読んだり、電話をすることも一切

禁止されている。⁽⁵⁾これは、瞑想では、他人と話をすることによって集中が途切れることが生じるから、それを避けるためである。その他、必要な個人的物品の持ち込み等は許されていた。

仏七の基本的な時間配分は次の通りである。

午前	三時三〇分～四時〇〇分	起床
	四時〇〇分～五時〇五分	第一支香
	五時二〇分～六時二〇分	第二支香
	六時二〇分～六時五〇分	早齋(朝食)
	七時〇〇分～七時一〇分	受八関齋戒
	七時三五分～八時四〇分	第三支香
	八時五〇分～一〇時〇〇分	第四支香
	一〇時二〇分～一一時二〇分	第五支香
	一一時二〇分～一一時五〇分	午齋(昼食)
午後	一二時〇〇分～一四時二〇分	午休
	一四時二〇分～一五時二五分	第六支香
	一五時四〇分～一六時三五分	第七支香
	一六時五〇分～一八時〇〇分	第八支香

台湾における仏七簡介(襄輪)

一八時〇〇分～一九時〇〇分	鹽洗
一九時〇〇分～二〇時〇五分	大回向
二〇時〇五分～二一時二〇分	各自用功
二一時三〇分	就寝

この時程に従って初日から第四日まで行われ、第五日以降は、第九支香、第十支香が追加されていく。⁽⁶⁾ちなみに支香は御線香一本分の時間を指し、ほぼ小一時間に相当する。興味深い点は、(第一・第二)、(第三・第四・第五)、



西蓮淨苑の道場



齋堂内部

（第六・第七・第八）支香と、それぞれ二支香、三支香がまとまりとなっている点である。すなわちほぼまとまった二時間、三時間の間に、興味深い行法が行われる。まず最初の支香において、仏前に向かってしばしの經典の朗唱が行われる。次に「南無阿弥陀仏」の称名を繰り返しながら、

ら、本尊を右繞する形で行道する。（これは本尊の安置された厨子の後ろ側を回れるように空間があるからであり、建築の様式に左右されるであろう。）おそらく最初の称名しつつの行道は、身・口・意の三業に阿弥陀を念じる行になると想像される。次に、最初の位置に戻り、最初から用意された座に坐る。この時の坐り方は、結跏趺坐でも半跏趺坐でも良いようであり、姿勢を正して坐る。この時も、「南無阿弥陀仏」と名号が唱えられる。称名は、最初はゆっくりとしたリズムであるが、やがて、少しずつペースを速めていく。名号は「阿弥陀仏」に代わり、やがて最速のリズムに達するときには「阿弥陀」または「阿弥」のみになり、それがしばらくの間、繰り返される。やがてピークを過ぎたかのように再びゆっくりとしたリズムの称名に戻る。この唱える時間がほぼ一支香分であり、頃合いを見計らって鐘が打たれる。おそらく坐つての称名は、口と意という二業に念仏することに相当するのであろう。

そして、次の一支香分は声を口に出さずに静かに跏坐する。この部分が先に述べた「止静」に相当すると考えられ、静かに阿弥陀仏を念じる時間となる。実際に静かに

坐っている間に行われることは、阿弥陀仏を観想することであり、意業による念仏であろう。この時間はいわゆる感想念仏の時間と言って良い。先に述べたとおり、阿弥陀仏の姿形を念じたり、あるいは太陽をイメージする日想観、あるいは阿弥陀仏の眉間にある白毫の相を観想する白毫観を行ったりするようである。⁷⁾

このように、称名念仏と感想念仏とが組み合わさった行法が、仏七という修行の特徴となるのである。

おわりに

以上、簡潔に仏七を紹介した。称名念仏と観想念仏（止観念仏といっても良い）が併習されていることを報告するに留まったが、日本にはその両者を同時に行う伝統は、管見の範囲では存在していない。よって、大変に興味深く思った次第である。言葉を変えて言えば、この「仏七」の修行には、まさしく宋代仏教の特徴として人口に膾炙する「禅浄双修」の実際がかいま見えるのではないだろうか。この仏七については、稿を改めて論じてみたい。

台湾における仏七簡介（襄輪）

注

(1) 円通宝殿という名称の建物が現在の中心のようであり、その奥に大雄宝殿が存在する。円通宝殿の内部に観世音菩薩が安置されている。大雄宝殿には、三宝仏が安置される。

『台湾仏寺導遊(一) 大台北地区(上)』(菩提長青出版社、一九八九年) 一八〇―一八二頁、参照。

(2) 智論老和尚講述『仏七講話』第一集(西蓮淨苑出版社、二〇〇三年、台北)、一頁。

(3) 西蓮淨苑発行「九四年上半年法会行事曆」(寺院案内パンフレット)による。

(4) 浄人は出家見習い期間中の人を指す言葉。沙弥になる前に本当に出家になりたいのかどうか、寺院の生活を体験しながらお手伝いをする立場の者である。出家が厳格なものと考えられている証左であろう。その期間は一年であり、この期間を経て初めて沙弥になれる。そして沙弥の期間を一年から二年間務めて、正式の出家者である比丘になる。なお女性の場合は沙弥尼のあとに式叉摩那という中間の期間があつてそれから比丘尼になることは言うまでもない。

(5) 「西蓮淨苑念仏七永日録取通知単」第三項「念仏七永日必須円満、不得中途退出。仏七期間禁語、禁止看書、打電話等」。

(6) 時間割は、西蓮淨苑発行「仏七時間表」(参加者向け説明)を参照。

台湾における仏七簡介（襄輪）

(7) 止静の状況に置ける観想は、『観無量寿経』に基づくと考えられる。